

特に、食事の提供、宿泊室等住環境の改善については、できるだけ速やかに改善を図るように心掛けてきた。

(3) 環境教育の視点に立った環境整備

- ① よく手入れされ整備された施設を目指して、日常点検や活動開始前の点検をしっかりと行うように心掛けた。
- ② 自然保護に配慮して、自然と共生するコース案内板等の補修及び更新を行ってきた。特に、木にやさしくという考えに立って、針金等による補修を行わないようにした。
- ③ 屋内の環境については、掲示板等を効果的に活用して美的環境を整えるとともに、クラフト作品を展示して、自然に対する関心を高めた。

(4) 多様なニーズに対応できるプログラムの開発

- ① 利用団体の研修のねらいも年々多様になってきており、新たなプログラムの開発が必要である。

特に、学校教育団体の利用に向けて、環境教育の観点からと、学社融合という観点からプログラムの開発を行ってきた。

環境プログラムについては、いろいろなネイチャージームを用意し、遊びを通じて自然に対する興味関心を高められるようにした。ネイチャージームを実施する頻度も多くなってきている。

学社融合プログラムについては、文化財めぐりを中心とした社会科学学習や、環境教育を中心とした理科学習などで実践してきた。日帰り利用によるプログラム実践も見られるようになってきた。

- ② 既存の活動種目を見直し、改善を加えた。特に、プログラムの内容が実態に合っているかという観点から再吟味して、より多くの利用者が楽しむことのできる内容に改めた。また、活動種目のカードを作成し、利用者に手軽に活用できるようにした。

クラフト活動も、新たに「焼き板づくり」や「森の標本箱」などを取り入れ、雨天時の活動のみならず通常の活動としても、多く活用されている。

(5) 広報活動の展開

- ① 多くの利用者に利用してもらえるよう、利用拡大に向けて、積極的に広報活動を行ってきた。報道機関を通じた周知活動や、スポーツ少年団をターゲットとした利用の啓蒙により利用拡大が図られた。利用者数及び利用団体数の上からも、社会教育団体の利用が大きく増加し、利用状況の中で占める割合も大きくなってきている。
- ② 郡山自然の家「友の会」を組織し、自然の家の良き理解者として、また、運営改善のための情報提供者として活用してきた。主催事業の参加者の中に占める「友の会」会員の割合も増加し、自然の家に対する理解も深まっているものと思われる。

(6) 特色ある主催事業の開発

- ① 学校週5日制対応事業としては、新しい発想に基づいて、内容を工夫した事業が展開された。

一つは、6月に行われた『松川浦への潮風紀行』であるが、他施設との連携を企図し、相馬海浜自然の家を利用して「潮干狩り」を中心とする事業を行った。当施設にはない「海」という自然環境を生かした活動を行い、

参加者からも大変好評であった。

もう一つは、11月に行われた『あなたもそばうち名人になろう』であるが、この事業は、大変興味の持てる内容、手軽に参加できる内容になっているため、例年参加者が多く、ニーズに十分応えられないという状況があった。そこで、休業土曜日と日曜日の2日間にわたって実施し、曜日の選択ができるようにするとともに、より多くの皆様に参加してもらえるように配慮した。1日に80名、2日で160名の募集に対して、合計182名の参加があった。

- ② 『たくましく生きる少年のつどい』は、年5回に分けて実施し、7泊12日の期間で行われた。今年度も、体験の拡大と他施設との連携を図るという二つの観点から、いわき海浜自然の家を利用して、「いかだ遊び」や「磯遊び」などの海型の活動を取り入れた。ただ、海型の活動を取り入れた日が、県内に多くの台風被害をもたらした日と重なり運営面に苦勞したが、悪天候の中、参加者の積極的な活動と取り組みにより成果が認められた。全体には、参加者も年々増加しており、一人一人の子どもの自立に結び付き、人間関係の拡大や生活経験の拡大につながり、多くの成果が見られた。

- ③ 『夢冒険キャンプ』は、夏季休業中に5泊6日の長期にわたって行われたが、夢のある活動、冒険的な活動を取り入れ、猪苗代湖西岸を中心とした移動キャンプを実施した。湖水浴のみならず、モーターボートやカヌーに乗る体験や、白虎隊の足跡を訪ねるハイキングなども行い、日常生活では味わえない貴重な体験を通じて、参加した児童生徒が一人一人大きく成長していったように感じられた。

(7) 安全対策の充実

「事故はどこでも起こり得る」という認識に立って、所員の安全意識の向上を図ったり、利用者へ働きかけをしたりして、積極的な安全対策を行ってきたため、事故等はほとんどなかった。

食中毒防止については、「手洗いの徹底」を働きかけてきた。食事を提供する食堂業者や利用者の意識も高く、大きな問題はなかった。今後も、油断すること無く万全の努力をしていくことが大切である。

スズメバチ対策については、捕虫装置を設置してハチを捕獲するというように、先手先手の措置を講じてきたため、ほとんど被害がなかった。

今後も、安全対策に万全を期すため、的確な情報を収集し対処していく必要がある。

(8) ハード面の工夫

利用者に快適に利用してもらえるように、与えられた条件の中でできることは何かを常に考えながらハード面の改善を行ってきた。屋内環境では、利用者が最初に利用するホールのフローリング、食堂を明るく快適な環境にするための塗装、きれいで気持ちよく入れる浴室への改修、自動販売機の設置などを行った。屋外環境では、自然の家らしさを醸し出す木を使ったオブジェ、活動エリアがよく分かる案内板の設置、気軽に休むことのできるベンチの設置などを行った。